

ボストン美術館 「パリジェンヌ展」

名古屋ボストン美術館 2017.06.10～10.15 世田谷美術館 2018.01.13～04.01

広島県立美術館 2018.04.11～06.10



「パリジェンヌ」とはパリに生きる女性のことで憧れの存在となっており、サロンの主宰者、子供の世話をする母親、流行を生み出すファッションイスタ、画家のミューズ、芸術家などで時代の変化と共に様々な表情を見せてきた。

一体、時代を写す女性たち「パリジェンヌ」に憧れるのは何故であろうか？

本展では、衣装や靴といった流行、「マネ」や「ルノアール」が描いた肖像画、映画や舞台で活躍した女優や踊り子の写真など、「ボストン美術館」の所蔵品「約120点」により、パリという都市を体現してきた女性姿の変遷をたどっている。

<見どころ>

1. パリジェンヌの魅力をひも解く ～18から20世紀まで～

生き方や装いが多くの女性の憧れの的となるパリジェンヌの存在感は、どのようにして形成されたのであろうかを彼女たちの姿から探る。

2. 芸術家を虜にし、自らも表現者であるパリジェンヌたち

パリでは「マネ、ルノアール、ドガ、ロートレック、ピカソ」らのミューズとして描かれた女性から画家、踊り子、女優などとして活躍した女性がいた。

3. ファッション史を彩る装飾品 ～流行の伝搬～

ファッションを伝える刊行物コルセット、ドレスにパリジェンヌを引き立ててきた多くの装飾品などを通して、ファッション史の変遷をたどる。



エドゥアール・マネ《街の歌い手》1862年頃油彩・カンヴァス

本作品は、70年ぶりの大規模な修復を得て初公開されるもので、黄色に変色したニスを取り除いたために、ドレスの筆致が鮮明に、緑の扉を隔てて奥に続く居酒屋の様子が見え、描かれた本来の色が蘇った当初の姿になっている。

修復された作品は、裾の白いペチコートにはサッと筆を走らせ、上着のブルーの縁取りにはグレーが重ねられる微妙な色の遊びが見られて、店内の様子も鮮明に描かれている。